

## 「新島ミライプロジェクト」～地域発SDGsの取組 (新島村商工会、新島水産加工業協同組合)

### 1. 背景

約300年の歴史を持つ「くさや」は伊豆諸島の中でも新島が発祥の地と言われている。新島の特産品としても知られているが、近年その担い手が減少している。昭和57年に26軒あった製造元は平成11年には16軒、令和3年現在で6軒となっている。また、島内では以下のような課題が生じている。

- ① 人口及び漁業者の減少
- ② くさやの島内消費量の減少
- ③ 温暖化等による漁獲量の減少や海洋ゴミによる汚染など海の環境悪化
- ④ 新型コロナウイルスの影響で島への観光客が大幅に減少したことによるくさやの売上減少

類似の課題は他地域でも生じており、伝統的な食文化を切り口としてSDGsの取り組みを進め、地域内外向けに情報を発信する手法は他の団体にも参考になると考える。

#### 【くさやについて】

(出典：新島水産加工業協同組合ホームページ)

江戸時代に日本橋の魚河岸で「くさや」と命名。「くさや」そのものは室町時代から作られ、長い間、島民の厳しい生活の糧となっていた。

塩は幕府の上納塩で貴重なものであり、魚を塩漬けにする際、使い残しの塩水を何度も使った。その塩水は熟成され、独特の風味を醸し出し、優れた保存性をも兼ね備えるようになった。今日も各商店(くさや製造元)が代々受け継がれた伝統の味を守っている。

### 2. プロジェクトの発足と取組内容

食文化としても貴重であり、地域にとって大事な存在である「くさや」だが、住民にとって島の誇りという意識が小さく、強みにできていないと新島村商工会の西胤さんは感じていた。1.背景に記載した課題について、①②③に対しては**持続可能な漁業・海の環境への取組と島内向けPR**、④に対しては**島外向けPR**等の必要性が考えられた。

くさやの新たな価値創出を目指して打開策を検討していた中、紹介によりアルミ製洗濯バサミをデザインするモンディアル株式会社と出会った。同社は海洋ゴミの中でも多くを占めるプラスチックゴミを減らす取組の一助として、使い捨てのプラスチック洗濯バサミを回収し、アルミ製洗濯バサミに換えるプロジェクトを検討しており、共に活動する地域を探していた。西胤さんと同社は意気投合し、くさやと関連した取組の検討を進めた。

令和2年11月、新島村が国からの交付金(新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金)を島内各団体へ交付した際、新島水産加工業協同組合に対して、くさや(干物)を模したアルミ製洗濯バサミを作り、「くさやの新たなPRとすること」「使い捨てをやめ、脱プラスチックを通じて海洋ゴミ問題を考え、島の暮らしを未来へつなぐ活動」について西胤

さんから提案を行った。検討の末、交付金のうち 300 万円を当取組に使うことが決定し、新島水産加工業協同組合と新島村商工会による「新島ミライプロジェクト」が発足した。300 万円のうち、200 万円は洗濯バサミ制作費、100 万円は広報費（PR 会社との連携）、と企画当初から広報も重視した予算内訳とした。

#### 【新島ミライプロジェクト】

海の恵みから生まれた伝統食「くさや」を受け継ぎ、海と共に生きる島の暮らしを未来へつないでいく活動

＜具体的な取組＞

- ・くさやを模したアルミ製洗濯バサミ「HOSSY（ホッシー）」を制作
- ・令和3年4月、新島の全戸に HOSSY を配布（1 家庭につき 20 個）
- ・EC サイトでくさやを購入した方に先着で HOSSY をプレゼント
- ・指定の店舗（くさや製造元等）へプラ洗濯バサミを持ち込むと HOSSY に交換



### 3. 地域内外の反応

PR 会社によるプレスリリース（令和3年3月25日）直後、取組は日本経済新聞に掲載され、その後、複数の情報番組でも取り上げられた。コロナ禍で暗いニュースが多かった時期でもあり、HOSSY の前向きな取組は好意的に取り上げられたようだ。メディアの相乗効果で、視聴者の多い番組にも取り上げられたことで、組合関係者や島民からも改めて好反応を得た。単に制作・配布するのみでなく、島内外に対して活動を広く知ってもらうことを目的とし、PR 会社を活用して広報活動をしたことが大きな宣伝効果を生んだ。

地域内では全戸配布の他、使用済プラ洗濯バサミを HOSSY と交換する取組を実施している。交換所を主にくさや製造元とすることで、地元住民、特に子どもたちが店舗に足を運び、くさやに触れるきっかけづくりとしている。さらに、島内の各学校の授業で取組を紹介する機会を得ることができた。授業の講師は、新島水産加工業組合が担当し、くさやの歴史や HOSSY を通じて海の環境を守ることの大切さを生徒に伝えている。生徒たちの反応は非常に良く、その後6月には式根島（新島村）での出張授業も実施した。

その後、学校の PTA が中心となり、島のメイン通りに「ホッシーを みんなで広めてごみ削減」という看板が掲げられた。このような島民発の行動は島内での認知が高いことの現れであり、関係者一同大きな喜びに包まれたとのことだ。



#### 4. 今後の展望

令和3年3月に始まったばかりの本プロジェクトは、学校授業への展開など早々に活動の広がりを見せている。学校授業ではSDGsや地域の仕事を学ぶカリキュラムを取り入れる必要が生じているが、先生がその内容検討に悩んでいる面もあり、授業での取組紹介の提案は歓迎されたという。10月には大島町の小学校より講師依頼を受け、取組紹介を実施した。くさやと環境課題をかけ合わせ、新たな価値創出を目指して、販路拡大・持続可能な産業とすること、そして子ども向けの取組は今後も力を入れて継続していきたいとのことだ。

また、HOSSYを通じて他地域や民間企業との連携も始まっている。干物が特産品である静岡県沼津市で取組が始まっており、メディアで取組を知った他地域からも問合せがあるとのことだ。また土産品としての販売やゲーム会社とのコラボレーション(株式会社バンダイナムコアミューズメント「釣りスピリッツ」)も開始した。

環境問題、持続可能な取組、SDGsの活動・・・これらはともすると「意識の高い一部の人の行動」と感じてしまう人もいるかもしれないが、西胤さんは「意識の高い活動というよりは、持続可能な社会のシンボルとしてHOSSYを知ってもらい、ユニークな活動として認知してもらいたい。明るい地域活動として全国でもプロジェクトが広がるとよい」と語る。村のふるさと納税の返礼品として扱う提案にも意欲を見せる。今後も地域内で協力しあい、モンディアル株式会社やPR会社と連携しながら、幅広く活動していくつもりだ。

#### <おわりに>

身近な日用品である洗濯バサミをメッセージ性のある品物に仕上げたデザイナーと、地域の伝統産業や美しい海や暮らしを残したいと願う人々が連携し、持続可能な世の中への想いがつまったプロジェクトが始まりました。一見かわいい「魚型のアルミ型洗濯バサミ」には、島の誇りである伝統産業「くさや」を守る想い、使い捨てをやめてゴミを増やさない決意が込められています。手にした人たちが自分事として考え、少しずつでも行動が変わっていけば、持続可能な社会への一歩となりうると思います。

「ユニークな明るい活動にしたい」という西胤さんの想いにはとても共感しました。観光分野でも、体験プログラムや旅行商品にSDGsの活動を取り入れるケースが増えていますが、それもやはり「楽しいこと」が大切な要素だと思います。新島ミライプロジェクトの活動に今後も注目してまいります。

【取材協力先】 新島村商工会 西胤 輝之進 様

【取材日時】 令和3年8月26日

【関連リンク】 <https://mondial.tokyo/demonstration1/>

モンディアル株式会社 (HOSSY デザイン会社・プロジェクト紹介ページ)

(地域振興部事業課 地域支援窓口 島しょ担当 平田)